

二月、雪のことなど

久保浩一

二月の雪が降りそうな日、時々思い出すことがある。大学時代、一年次後期のフランス語の単位を落としかけたことを。当時、大学に車で通い始めたばかりで、寒い時期における自動車道の脅威など気にすることなく運転していた。気軽なものである。

二月初旬に行われたフランス語の試験当日も、車を走らせていたのだが、国道375号線のトンネルを抜けると郷原は雪国だった。積雪で大渋滞が発生。迫る試験開始時間・・・結局、試験が終了する頃、大学に着いた。

例えば、法学部所属の学生であれば、フランス語などは所謂「第二外国語」として選択している場合が多いのだろうけれども、筆者は文学部所属で仏文科を専攻しており、フランス語は必修単位である。さすがに焦った。このままでは次年度、後輩達と机を並べ、同じ内容を再受講することになってしまうのである。どうにも落とすわけにはいかなかった。

大学に到着すると、すぐに担当教授の研究室に伺い正直に事情を話した。暫し沈黙の後、「では、こうしましょう」と沙汰が下った。代替措置としてフランス語で「短い話」を作って提出するようにとの指示。その内容を読んで単位を付与すべきか否かを検討しましょうとのこと。とりあえず最悪の事態は回避できそうだった。

「短い話」のテーマは、すぐに決まった。「俗物根性」である。その頃読んでいた、加藤周一『読書術』（岩波書店同時代ライブラリー、1994年10月5日第8刷発行）で紹介されている「スノビズム係数」という言葉が気になっていた。例えば、有名な著作などを読んだことがないにもかかわらず、「通」ぶって読んだふりをしている者が、その内容について質問をされ、答えられずに、結局、読んでいないと白状するまでの時間が長ければ長い程、俗物根性の度合い（スノビズム係数）が高いという内容であったと思う。

早速、筆者はマルクとガストンという架空のフランス人男性二人の会話を書くことにした。普段から知ったかぶりのガストンと、それを快く思っていないマルクが喫茶店で交わす会話の話題は夏目漱石である。ガストンは、勿論、漱石を知っていると言う。そこで、マルクが、「有名な漱石の詩の一節」を紹介したところ、ガストンは当然の如くその詩を知っていると答え、更に、口からでませの「批評」を加えたところでマルクのネタバレ。マルクは、「有名な漱石の詩の一節」は、実は漱石の詩ではなく、ポール・ヴァレリーの詩であったと訂正し、

ガストンの知ったかぶりを厳しく指摘するという内容である。

ところで、「この本を読んだことある人？」と問われ、目を泳がせ、顔を赤らめ手を挙げる人に出くわしたことはないだろうか（ま、あまりないだろうけれど）。そんな無様なことになるのであれば、読んでいないと正直に言えばよかろうに。周りの人間は、読んだと答えた人間の醸し出す「寄らば、斬るぞ」的な緊張感から察して、「あ、ほんとは読んでないのね」と直感的に分かる。そのような事態は避けたいものである。羞恥心の欠片もない愚行ではあるが、筆者の中にも虚栄心が蠢くこともあり、そのような事態に陥らないとは限らない。

そこでというわけでもないが、小説『ある男』で第70回読売文学賞を受賞した、作家平野啓一郎氏著『本の読み方～スロー・リーディングの実践』（PHP新書）をわりと最近になって読んだ。万卷の書をすべて紐解けるわけがないのであるから、これぞと選択した本をじっくり読めばよいという至極当たり前のことに気づかされた。また、「速読家の知識は単なる脂肪である」との指摘は、読書量に自信がない筆者を救ってくれた。因みに、『ある男』は読ませてもらった。

さておき、「俗物根性」を読み返してみた。日本語訳で原稿用紙二枚程度に収まるそのストーリーはなんてことはなく、拙いフランス語が綴られている。にもかかわらず、「良」をいただき事なきを得た。筆者が仏文科の学生であったが故の温情であったのかもしれない。二月の雪が降りそうな日、時々思い出すのである。

（初出：広島司法書士青年の会会報平成31年度第1号 一部加筆修正）